★ The Online Magazine of the U.S. Embassy and Consulates in Japan ★

米国大使館

アメリカの素顔を映すマガジン

Fall 2009

American View

アメリカン・ビュー

Address to Students

新学期を迎えた全米の子供たちに向けたオバマ大統領のスピーチです。

English Education

小学校での英語教育について、専門家が興味深い考えを語ります。

Careers in Interpreting

通訳者に必要な素質や訓練について、現役通訳者に聞きました。

Evolving Language

英語が常に変化を続ける要因を探ります。

From the Editor

初めまして、駐日米国大使のジョン・Ｖ・ルースと申します。私が東京に着任してから初めて発行されるAmerican Viewのゲスト編集長として、2009年秋号をご紹介できることをうれしく思います。特に、本号のテーマが「教育」と聞き、この役割を喜んで引き受けることにしました。私は、教育と国際交流の分野において日米関係を強化することがいかに重要であるかを、これまでに何度もお話ししてきました。米国大使として、教育・科学分野での日米間の交流を支援する取り組みを数多く推進していきたいと思っています。

私は着任以来、地下鉄に乗って学校に通う日本の子供たちの勉強に対する熱意と礼儀正しさに、とても感じ入っています。米国では、新学期と言えば、色づく木の葉や秋の夜の冷んやりした空気を思い浮かべます。日本のちょうど今ごろの季節でしょうか。日本の場合は、新年度が始まって既に半年以上が経過していますが、新しいことを学び、自分を磨くにはどうすればよいかを考えるのに、遅すぎるということはありません。９月に新学期が始まってすぐ、オバマ大統領は米国の子供たちに、学習目標を定め、それを達成するためにできることはすべて実行しなければならない、と語り掛けました。本号には、自らの学習に対して子供たちそれぞれが責任を持つように説く、この大統領のスピーチを収録しています。

11月には、米国国務省と教育省が共同で国際教育週間（ＩＥＷ）を開催し、全世界で100カ国以上が参加します。ＩＥＷは国際教育・交流の利点を説くよい機会であり、国際的な環境に出て行く米国人にその準備をさせるとともに、未来の外国の指導者たちが米国留学をしたくなるようなプログラムを推進しています。

国際教育には、英語の学習や使用のさまざまな側面が関係することが多くなっています。日本では、最近の学習指導要領改訂に伴い、公立小学校での英語教育の問題が話題となっています。この問題について、第２言語としての英語教育の専門家ジェーン・ブライス・ウォレン博士から、興味深いご意見と、教師と生徒のいずれにとっても役立つヒントをいただきました。

次に本号では、日英通訳の仕事にスポットライトを当てます。政府高官レベルの国際会議や会談、あるいはテレビなどで通訳として腕を振るっている２人のプロから、日英通訳者となるための訓練の様子や、通訳志望者へのアドバイスを伺いました。

最後に、英語の進化についての記事を２本紹介します。ひとつは、「言語」というものが社会の中で常に変化する、生きている力であることを称賛し、アメリカ英語の活力の源となってきた多文化的要素について論じる記事です。もうひとつの記事は、若者の間での、携帯メールのような電子的コミュニケーション手段の利用の増加が、米国のスラングに及ぼす影響を考察します。

本号が、英語の学習や指導、さらには教育面での日米交流の促進という点で、読者の皆さまの刺激になることを願っています。

ジョン・Ｖ・ルース　駐日米国大使

American View

--2009年 秋号--

編集・発行

在日米国大使館広報・文化交流部

〒107-8420　東京都港区赤坂1-10-5

本誌掲載の記事に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解を表すものではありません。本誌に掲載されている記事、写真、イラストを非営利目的で複製することはできますが、著作権上の制限が明示されている場合には、表示された著作権者の許可を得てください。

本誌に対するご意見・ご感想は、*American View* ページ（http://japan.usembassy.gov/american-view.html）のフォームで送信してください。

<表紙>ウェークフィールド高校で生徒に話をするオバマ大統領（© AP Images）

Address to Students

希望と責任—全米の子供たちに向けたオバマ大統領の言葉

2009 年９月８日、ウェークフィールド高校（バージニア州アーリントン）

皆さん、こんにちは。ありがとう、皆さん。どうぞ座ってください。皆さん、元気ですか。ティム・スパイサー君（編集部注：オバマ大統領のスピーチ前に大統領を紹介する役を務めた高校生）はどうかな。今日は、バージニア州アーリントンのウェークフィールド高校に来ています。また、幼稚園から高校３年生まで全米の子供たちが、この様子を見ていることと思います。今日、皆さんが参加してくれることを、心からうれしく思っています。そして、このように素晴らしい歓迎をしてくださったウェークフィールド高校の皆さん、ありがとう。君たちに盛大な拍手を送りましょう。

多くの皆さんにとって、今日は新学年の初日です。そして幼稚園、中学、または高校に入学した皆さんは、新しい学校の１日目ですから、少し不安な気持ちになったとしても不思議ではありません。高校３年生の中には、今とても気分がいい人もいると思います。あと１年で卒業ですから。また、学年に関係なく、まだ夏休みで、今朝もう少し寝坊ができたら良かったのに、と考えている人もいるでしょう。

その気持ちは分かります。子供のころ、私たち一家は海外に住んでいました。数年インドネシアで暮らしました。母は、現地で米国人の子供たちが通う学校に私を通わせる余裕はありませんでしたが、私が米国の教育に遅れてはいけないと考えていました。そこで月曜から金曜まで、補習として、自分で私に勉強を教えることにしたのです。でも、母は仕事をしていたので、補習は朝４時半からするしかありませんでした。

想像できると思いますが、そんなに早く起きるのは、私にとってあまりうれしいことではありませんでした。勉強しながらキッチンのテーブルで眠ってしまうこともよくありました。しかし、私が文句を言うたびに、母は私をにらんで「私だって楽じゃないんだからね」と言いました。

ですから、まだ新学期のペースに慣れようとしている皆さんの気持ちは、私にも分かります。けれど、今日はここで、皆さんに大事なことをお話ししたいと思っています。皆さんの教育について、そして新学年に当たって皆さんに期待することについてお話します。

私は、教育についてのスピーチをたくさんしてきました。また、責任ということについてもたくさん話をしてきました。

生徒にやる気を起させ、学ぶことを促す教師の責任についても話してきました。

バージニア州ウェークフィールド高校で全米の子供たちに呼びかけるオバマ大統領（© AP Images）

子供たちが横道にそれることなく、宿題をきちんと済ませ、起きている間中テレビやゲームにくぎ付けにならないようにさせる親の責任についても話してきました。

また、政府の責任についても、何度も話してきました。（教育について）高い基準を設定すること、教師や校長先生たちを支援すること、生徒に与えられるべき機会が与えられておらず、正常に機能していない学校を建て直すこと、についての責任です。

しかし、最終的には、いくら世界で最も熱心な先生方や協力的な両親がいても、また世界で最も優れた学校があっても、皆さん全員が自分の責任を果たして、きちんと学校に通い、先生の話をよく聞き、両親やおじいさん、おばあさん、そのほかの大人たちの言うことを聞き、成功するために必要な努力をしなければ、何の役にも立ちません。今日私がお話ししたいのは、そのことです。皆さんの教育に対する皆さん１人１人の責任についてです。

まず、自分自身に対する皆さんの責任についてお話ししたいと思います。皆さん誰にも、それぞれ得意なことがあります。それぞれ独自の能力を備えています。皆さんには、それを見つける責任があります。それこそ、教育が提供できる機会です。

文章を書くことが上手になる人がいるかもしれません。中には、本や新聞の記事を書けるほどうまくなる人もいるかもしれません。でも、まず宿題の作文を書いてみなければ、そのような才能があるかどうかは分かりません。新しいアイデアを生んだり、発明家になる人もいるかもしれません。中には、iPhone のような全く新しい機器や、新しい薬、ワクチンを発明する人もいるかもしれません。でも、まず理科の研究課題をやってみなければ、それは分かりません。また、市長や上院議員や最高裁判所の判事になる人がいるかもしれません。でも、まず生徒会や討論クラブに参加してみなければ、それは分かりません。

皆さんが人生で何を目指すにしても、必ず教育が必要です。皆さんの目標が、医者、教師、あるいは警官になることであっても、看護師、建築家、弁護士、あるいは軍人になることであっても、必ず優れた教育が必要になります。学校を中退して、良い仕事に就くことはできません。良い仕事に就くには、そのための教育を受け、努力をし、学ばなければなりません。

そして、これは、皆さん自身の人生と将来のためだけに大事なことではありません。皆さんが教育から何を得るかによって、まさにこの国の将来が決まるのです。米国の将来が皆さんの肩にかかっています。皆さんが今、学校で何を学ぶかが、今後私たちが国家として、最大の課題に対処していけるかどうかを決めるのです。

皆さんが理科や数学の授業で学ぶ知識や問題解決能力が、がんやエイズなどの病気の治療に、そして新しいエネルギー技術の開発や環境保護に必要となります。歴史や社会科の授業で身に付ける洞察力や批判的な思考をする能力が、貧困、ホームレス問題、犯罪、差別との闘いや、この国をより公正で自由な国とするために必要となります。皆さんがあらゆる授業で身に付ける創造力や創意工夫の能力が、新しい雇用をつくり出し米国経済を発展させる新たな企業の設立に必要となります。

皆さんの１人１人が、自分の才能と技能と知性を伸ばし、私たちのような年長者がこの国の最も難しい問題を解決するのを助けてくれなければいけません。皆さんがこうした努力をしなければ、皆さんが学校を中退してしまえば、皆さんは自分を見捨てるだけでなく、自分の国を見捨てることになります。

学校で良い成績を上げることが必ずしも簡単でないことは分かっています。皆さんの中には、今、人生の苦難に直面していて、学校の勉強に集中できない人もたくさんいるでしょう。

分かります。私には、それがどういうこと

か分かります。私が２歳のときに父が家を出て、私は母子家庭で育ちました。母は仕事をしなければならず、時には生活費にも苦労し、私たちに、ほかの子供たちが持っている物を買い与えることができない時もありました。父親がいなくて寂しいと思うこともありました。孤独を感じたことや、周囲になじめなかったこともありました。

そのために、学校の勉強に十分集中できなかったこともあり、自慢できないようなことをしたり、問題を起こしたこともありました。私の人生が悪い方向へ進む可能性は大いにありました。

しかし幸運にも、私には何度もやり直すチャンスが与えられました。大学に行き、法科大学院に進んで、夢を追うことができました。ファーストレディーである妻のミシェル・オバマにも、同じような経歴があります。ミシェルの両親はいずれも大学に行っていませんし、お金持ちでもありませんでした。しかし、ミシェルが国内でも有数の良い学校に行けるように、２人は一生懸命に働き、ミシェル自身も一生懸命に努力をしました。

皆さんの中には、このような幸運に恵まれない人もいるかもしれません。必要とする支援をしてくれる大人が、周りにいないかもしれません。家族が失業して、お金に余裕がないかもしれません。住んでいる地域が安全ではなかったり、悪いと分かっていることを無理にやらせようとする友達がいるかもしれません。

しかし最終的には、人生のさまざまな事情、つまり、外見、生まれ、裕福か貧乏か、家庭環境といったことは、どれも、宿題をしなかったり学校で悪い態度を取る言い訳にはなりません。先生に口答えをしたり、授業をさぼったり、学校を中退する言い訳にはなりません。何事も、努力をしない言い訳にはならないのです。

今、皆さんの置かれている状況が、皆さんの将来を決めるわけではありません。誰も皆さんの運命を決めることはできません。この国では、自分の運命は自分で決めるものだからです。自分の未来は自分で築くものだからです。

それを、皆さんと同じ若者が全米各地で毎日実行しています。

例えば、テキサス州ローマのジャズミン・ペレスさんのような若者です。ジャズミンさんは、学校に入学したときには英語が話せませんでした。両親はいずれも大学に行っていません。しかし彼女は一生懸命勉強し、良い成績を取り、奨学金を得てブラウン大学に入り、現在は大学院で公衆衛生学を専攻して、いずれは博士号を取得するでしょう。

カリフォルニア州ロスアルトスのアンドーニ・シュルツ君は、３歳のときから脳のがんと闘ってきました。さまざまな治療や手術に耐えてきましたが、これが原因で記憶力に影響が出て、学校の勉強にとても時間がかかり、ほかの子供

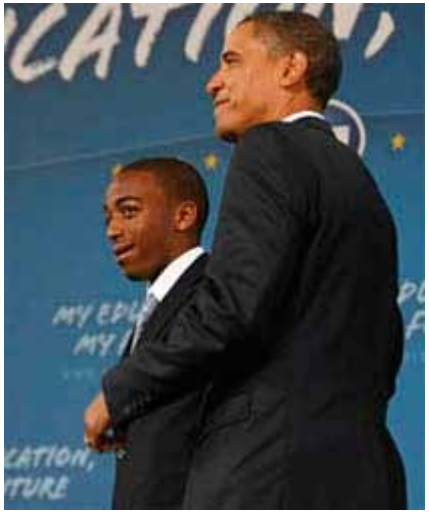
ウェークフィールド高校で生徒たちの質問に答えるオバマ大統領とダンカン教育長官（写真右）
(© AP Images)

たちよりずっと長い時間を要しました。それでもアンドーニ君は決して勉強で遅れたことはなく、今年の秋には大学に入学します。

そして、私の地元、イリノイ州シカゴのシャンテル・スティーブさんは、シカゴ有数の治安の悪い地域で、里親から里親へと転々としながらも、何とか地元の医療センターで仕事を見つけ、若者がギャングに入らないようにするためのプログラムを始めました。シャンテルさんは、順調に、優等で高校を卒業し、大学に進学する予定です。

ジャズミンさん、アンドーニ君、シャンテルさんは、皆さんと何も変わるところのない若者たちです。皆さんと同じように人生でさまざまな課題に直面しています。ある面では、彼らの方がずっと厳しい状況にあります。それでも彼らは決してあきらめませんでした。自分の人生と自分の教育に責任を持つことを選び、自ら目標を設定したのです。私は、皆さんにもそうしてほしいと思います。

そこで今日は、皆さん１人１人に、自分の学習目標を決めること、そしてその目標を達成するために全力を尽くすことをお願いしたいと思います。その目標は、例えば、宿題を全部すること、授業をよく聞くこと、毎日本を読むこと、といった簡単なことで構いません。課外活動や地域社会でボランティアをすることかもしれません。私は、子供たちには安全な環境で学ぶ権利があると信じていますが、私と同じように考えて、出身や外見などを理由にいじめられている子を助けようと決意する人もいるかもしれません。もっとよく勉強をするために、自分の健康に気を配ろうと考える人もいるかもしれません。ところで、健康と言えば、この秋から冬にかけてインフルエンザが広がらないようにするために、皆さんも普段からよく手を洗い、具合が悪いときは学校を休むようにしてください。



オバマ大統領を紹介する役を務めたスパイサー君と
（© AP Images）

皆さんがどのような目標を立てるにしても、これに真剣に取り組み、一生懸命努力してほしいと思います。

皆さんは、テレビ番組を見て、一生懸命努力をしなくても金持ちになれると思ったり、成功への道はラップやバスケットボールやリアリティー番組のスターになることだと思ったりすることもあるでしょう。しかし、それが実現する可能性は高くありません。

実際には、成功への道は険しいものです。勉強するすべての科目を好きになれるわけではありません。どの先生ともうまくいくわけではありません。与えられる宿題が、どれも今の皆さんの生活に役立つと思えるわけではありません。そして、初めての試みでどんなことにも成功できるわけではありません。

それでいいのです。世界で最も大きな成功を収めている人の中には、たくさんの失敗を重ねてきた人たちもいます。「ハリー・ポッター」の作者Ｊ・Ｋ・ローリングは、ハリー・ポッター・シリーズの１巻目の出版にこぎつけるまでに、12 社もの出版社から拒否されました。マイケル・ジョーダンは、高校のバスケットボール・チームのメンバーから外されたことがありました。ジョーダンは、選手生活を通じて、たくさんの試合に負け、シュートを何本も外しました。しかし彼は、「人生で何度も何度も失敗してきたけれど、そのおかげで成功できた」と言っています。

こうした人たちが成功したのは、失敗にとらわれてはならないということ、失敗から学ばなければならないということを理解していたからです。失敗から、次回はどうすればいいかを学ばなければなりません。ですから、何か問題を起こしたからといって、トラブルメーカーだということではありません。正しく行動できるよう、さらに努力をする必要があるということです。悪い成績を取ったからといって、頭が悪いということではありません。もっと勉強する時間を増やす必要があるということです。

生まれながらにして何でもうまくできる人はいません。一生懸命努力することでうまくなるのです。新しいスポーツを始めた途端に、代表チームに入ることはできません。新しい歌を最初から正確に歌うことはできません。練習が必要です。学校の勉強も同じことです。数学の問題も、何回か解いてみなければ正しい答えが出ないことがあります。文章を何回か読み返さなければ意味が理解できないこともあります。レポートは、提出するまでに何回か書き直さなければ、良いレポートにはなりません。

質問をすることを恐れてはいけません。必要なときに助けを求めることを恐れてはいけません。私は毎日それを実行しています。助けを求めることは、弱さを表すものではありません。強さを表すものです。なぜなら質問をしたり助けを求めることは、分からないことがあるという事実を認めることであり、その結果として新しいことを学べるからです。ですから、両親、おじいさん、おばあさん、先生、コーチ、カウンセラーなど、信頼できる大人を探して、皆さんが目標達成への道を真っすぐに進むことに協力してもらってください。

そして、たとえ壁に突き当たっても、意志をくじかれても、また周りの人たちに見捨てられたように思っても、自分自身を見捨ててはなりません。自分を見捨てることは、自分の国を見捨てることだからです。

米国の歴史は、苦しい状況に直面してあきらめてしまう人たちの歴史ではありません。そのような状況でも前進を続け、一層努力し、自分の国を愛するがために、全力を尽くすことしかできなかった人たちの歴史です。

それは、今から250年前に、皆さんと同じ生徒だった人たち、そして後に革命を起こしてこの国を建国した人たちの歴史です。若者たちです。75年前に皆さんと同じ生徒だった、大恐慌を乗り越え、世界大戦に勝利し、公民権を求めて戦い、人類を月に着陸させた人たち。そして、20年前に皆さんと同じ生徒だった、後にグーグルやツイッターやフェースブックを設立して、コミュニケーション手段に変革をもたらした人たち。こうした人たちの歴史です。

そこで今日は、皆さんに質問しようと思います。皆さんはどのような貢献をしますか。どのような問題を解決しますか。何を発明しますか。今から20年後、50年後、あるいは100年後にここでスピーチをする大統領は、皆さんのこの国への貢献について、何を語ることになるのでしょうか。

皆さんの家族、先生、そして私も、皆さんがこれらの質問に答えるために必要な教育を必ず受けられるように、全力を尽くしています。私は、皆さんの教室を整備し、学習に必要な教科書や設備やコンピューターをそろえるために、一生懸命努力をしています。しかし、皆さん自身も努力をしなければなりません。新しい年度を迎え、皆さんが真剣に努力し、いかなることにも全力を尽くすことを、私は期待しています。皆さんの１人１人が素晴らしい成果を上げることを期待しています。ですから、私たちを失望させないでください。皆さんの家族を、皆さんの国を失望させないでください。そして何よりも、自分自身を失望させないでください。私たち皆が誇れるように、努力をしてください。

皆さん、どうもありがとう。皆さんに神の恵みがありますように。米国に神の恵みがありますように。ありがとう。

English Education

小学校の英語教育

ジェーン・ブライス・ウォレン博士は英語教育の専門家であり、1991 年以降、大学院生から幼稚園児までの幅広い生徒を対象に英語指導を行ってきた。また、ミシガン州のカラマズー大学で、留学生のための英語学校（ＥＳＬ）プログラムの開設に関わったほか、グアテマラの小・中学校でボランティアの英語教師を務めた経験も持つ。2008 年から 2009 年までは、京都の同志社大学で客員研究員を務めた。この間、第２言語教育、社会言語学、カリキュラム開発、日本の歴史と文化といった分野に関する幅広い知識と経験に基き、日本各地のアメリカンセンターで開催された英語教育法および学習活動に関する数々のワークショップで、研究を発表した。このインタビューは、ウォレン博士が日本滞在中に行ったものである。

問　ウォレン博士はこれまで、さまざまな立場で日本で仕事をされていますが、最近はどのような仕事に就いていましたか。また、ご自分の専門分野は何だとお考えですか。

ウォレン博士　今年の７月 31 日まで、同志社大学の文化情報学部で客員研究員として勤務していました。

私は日本の大学に留学していた時に英語を教えていましたが、正式に教え始めたのはインディアナ州に住んでいた時で、英語の集中講座で教えていました。第２言語としての英語教育の分野で修士号を取得し、さらに博士課程に進む決意をしたのは、その時の経験からです。

私は、言語教育、中でも文化面の教育にオンラインツールを利用することにとても興味があります。同志社大学では、大学生の英会話能力を向上させるためのオンラインポートフォリオ・プロジェクトで、教職員の方々と協力する機会を得ました。

ジェーン・ブライス・ウォレン博士

問　日本では、英語教育が大きな話題となっていますが、英語教育を効果的に行うために重要な要素にはどのようなものがありますか。また、初めて英語を教える先生たちに何かアドバイスはありますか。

ウォレン博士　もちろん、熱意と刺激的な要素は不可欠ですが、授業や学習活動がクラスの生徒たちのニーズを確実に満たすようにすることも重要です。教師が授業計画を立てる前に、クラスの目的や目標をしっかり把握することをお勧めします。そして、その目的や目標の達成に向けて授業が計画されていることを確認すること。しかし、何よりも、教師自身が授業を楽しむことですね。教師が授業を楽しめば、生徒も授業を楽しみますから。

子供に英語を教える場合、創造力が不可欠です。授業での学習活動が毎回ワンパターンでは、生徒はすぐ

に飽きてしまいます。語彙（ごい）や文法を覚えさせるために生徒に反復練習させるのですが、その際にさまざまな学習活動を用いることが重要です。子供たちは、動き回ったり、学んだ言葉を使うことのできる活動は何でも好きです。特に、ゲームやロールプレーイング（役割演技）が好きですね。

問　大きくなってからでなく、幼いころから外国語を学ぶ利点にはどのようなものがありますか。

ウォレン博士　一般的に、非常に幼いころから第２言語を学べば、ネイティブ・スピーカー（その言語を母語として話す人）並みの発音になります。また、子供は他人の目を気にすることが少ないので、間違えても積極的に話そうとします。これによって、自分の知識を試し、語学力を高めることが可能になります。一方で、年齢を重ねてから語学を学習する場合は、既にほかに学習経験があるため、新しいことを勉強し、学習する方法を知っている、という利点があります。さらに、年齢が上の生徒は第１言語の幅広い知識を持っているので、第２言語を第１言語と関連付けてうまく学ぶことができる、という利点もあります。

問　大人と子供では英語の指導方法は異なりますか。

ウォレン博士　はい。中学生ぐらいまでは、文法を系統立てて教える必要はありません。むしろ、授業は楽しく、子供たちにできるだけ多く英語を話させるように工夫しなければなりません。大きくなれば文法の規則や構造を学ぶ機会や理由もあるでしょうが、小さい時に必要なのは、英語を話す練習をすることだけです。一般的に大人の場合は、実際に英語を使う機会をたくさん提供しながら、系統立った文法指導を行うと上達します。

問　文化は英語学習にどのような役割を果たしますか。

ウォレン博士　文化は、語学学習に不可欠な要素です。文化を学ばずして外国語を学ぶことはできません。英語は興味深い言語です。なぜなら、英語を第１言語とする文化が世界中に多数存在するからです。英語の授業では、話題にできる文化的側面がいろいろあるので、とても楽しいです。

問　米国の文化を教えるためにどのような活動を取り入れていますか。

ウォレン博士　私は米国の文化的側面を伝える写真をよく使います。例えば、７月４日の独立記念日の写真などです。米国人が独立記念日を祝う写真を見ることで、米国の文化について多くを学ぶことができます。例えば、パレード、バーベキュー、花火、赤・白・青色の飾りつけなどの写真を見せることで、家族や愛国心といった米国人の価値観を教えることができます。生徒たちは写真を見て楽しみながら、独立記念日のお祝いについて学んだことを話し合います。この学習活動は、英語能力が低い生徒にもたいへん効果があります。

東京アメリカンセンターで講演するウォレン博士（写真提供　東京アメリカンセンター）

問　英語を学ぶ上で、日本人の生徒に特有の問題はありますか。どうすればそのような問題を克服することができますか。何か具体的なアドバイスはありますか。

ウォレン博士　多くの日本人の生徒は会話に自信がなく、何と言ったらいいか確信が持てるまで話そうとしません。しかし、調査によると、言おうとしていることが正しいと確信していなくても積極的に話そうとする生徒の方が、語学学習に優れていることが分かっています。ですから、日本人の生徒は、たとえ間違えるのではないかと思っても、コミュニケーションを図ろうとすることが重要です。教師がすべての間違いを訂正するようなことをしなければ、生徒は気楽に英語を話すようになります。

日本人の生徒に対する私のアドバイスは、できるだけ英語を話す練習をしなさい、ということですね。自分の言いたいことをどう言えばよいのか分からなくても話すこと。質問をたくさんすること。時間をかけて英語圏の文化を学ぶこと。英語圏の文化について英語で読んで、英語を使う練習をすること、です。

問　英語を学ぶために、生徒は授業以外にどのような活動を行うとよいですか。

ウォレン博士　インターネットを利用すれば、生徒は授業以外にもさまざまな方法で英語を学ぶことができます。音楽を聴いたり、テレビを見たり、映画を見たり、興味のあるいろいろな読み物を読むこともよいでしょう。そして、学んだ英語を使うために読んだことを皆で話し合うことは、素晴らしいことだと思います。

問　子供の英語学習で、親にできることはありますか。

ウォレン博士　親にできる最も重要なことは、語学を学ぶ姿勢の模範を示すことです。例えば、子供と一緒に授業を受けて、一緒に英語の文を声に出して言う練習をすることもよいでしょう。子供と食事をしながら、英語だけで話すのもよいかもしれません。一緒にゲームをしたり、本を読むなど、ほとんど何でも英語で行うとよいでしょう。子供たちを英語を話す気にさせ、話す機会を与えれば、子供たちは気楽に英会話をするようになり、その結果、より優れた語学学習者となるでしょう。子供たちは、親が語学学習の模範を示すことで、英語を学習する気持ちになるのです。

問　一般的に、外国語を学ぶことでどのような教育上の利点を得ることができますか。

ウォレン博士　外国語の学習には数々の利点があります。例えば、他人とのコミュニケーション能力の獲得、世界観の広がり、言語への認識が深まることによる母語能力の向上、語彙の増加などがあります。

問　生涯にわたり語学学習に関心を持ってもらうには、どうしたらよいですか。

ウォレン博士　文化を教えることで、生徒たちは、文化とその言語をさらに学ぶことに関心を持つようになると思います。ですから、文化の勉強を語学学習の授業に組み入れることはとても大切です。

＊＊＊＊＊

インタビュアー

レイバン・L・ムーア
シカゴ大学ハリス・スクール（公共政策）の大学院生。2009 年夏、在日米国大使館報道室のインターンを務める。以前日本の英語学校で講師を務めた経験を持ち、ジャーナリストとして記事も書いている。

Careers in Interpreting

言葉の架け橋—日英通訳の仕事

宇田川サーシャ

国際会議などでガラス張りのブースの向こうでヘッドフォンを付けて座り、マイクに向かって流ちょうな外国語をしゃべる人—これが、多くの人が抱いている通訳者のイメージだ。こうしたイメージは、「シャレード」（1963 年）のオードリー・ヘップバーンや「ザ・インタープリター」（2005 年）のニコール・キッドマンといった女優たちによってつくり出されたのかもしれない。彼女たちはいずれも、ロマンティックで、スリル満点のさまざまな事件に巻き込まれる国連の会議通訳者を演じた。私たちの目にはつきにくいかもしれないが、ささやき声で話すことができるほど世界各国の政府高官の近くに立っている通訳者の姿は、少し陰に隠れてはいるものの、毎日のようにニュース番組で見ることができる。とは言え、すべての通訳者が、こうした国際会議や首脳会談のような極度に緊張を強いられる状況で仕事をしているわけではない。ビジネス会議、医師の診察、裁判、視察など、通訳者の活躍の場は多岐にわたっている。

通訳者は、ある言語を別の言語へ変換することで、現代社会で必要な異文化間コミュニケーションを可能にしている。しかし通訳者という「スペシャリスト」が行っているのは、言葉を操作することだけではない。ひとつの言語から別の言語へ、概念や考えを仲介して伝えている。言語間で情報を正確に伝達するためには、通訳をする対象のテーマを理解していなければならない。さらに、使用する言語をとりまくそれぞれ異なる文化に対する豊かな感性を持っていなければならない。日英通訳は、日本語と英語の言語学的隔たりが大きいため、とりわけ難しい仕事である。通訳者はほぼ直感的にこの隔たりを埋め、単語を逐一置き換えることをせずに話し手が意味する内容を表現する能力を持っていなければならない。

通訳者には、話し手が話す内容を伝える言語上の技術だけでなく、会話を中断させないような状況にふさわしいやり方で言葉の意図を表現する能力もなければならない。フリーの通訳者でサイマル・アカデミー講師、ＣＮＮの放送・同時通訳もこなす土谷ふみ氏は、次のように説明する。「ほとんどの場合、情報の正確さとスピーチや会話の自然な流れは同じくらい重要です。多分、第１に求められるのは正確さでしょう。その次が『センス』ですが、正確さと同じくらい重要です。細部にとらわれ過ぎると、通訳や会話は退屈でつまらないものになりかねません（そういう場合は、『通訳自体は完ぺきだったけれど、会合は大失敗だった』と言います）。例えば、表敬訪問、結婚式の披露宴やレセプションの祝辞の場合は、正確に訳そうとするあまり雰囲気を損なうよりも、状況にふさわしい適切な語調で通訳を行うことに細心の注意を払う必要があります。もちろん例外もありますが…。法廷通訳や医療関係の通訳など非常に技術的な問題の場合は、細部が

宇田川サーシャ
在日米国大使館報道室英語編集者。1991 年に来日、1997 年より和英翻訳者として働く。2009 年４月より在日米国大使館報道室に勤務。

とても重要なので、通訳者は一語一句忠実に訳さなければなりません。このような場合、通訳者には話し手が言ったことを『要約』する自由はありません」

国務省の通訳課で上級外交通訳官を務めるポール・ハーシー氏は、通訳を行う際の思考プロセスについてこう語った。「聞くことです。ただし、今すぐに話し手と同じくらい深く理解する必要のない学生がノートを取っているような聞き方ではないし、通常の代表団のように自分にとって興味のある話題にだけ耳を傾けるような聞き方でも、話し手と同じくらい長い年月をその道の研究に費やしているため、話し手の言わんとするところをすべて理解するために必死で考える必要のない専門家の聞き方でも、あるいは全体像さえ分かればいいので、詳細は無視しても差し支えないといった聞き方でもありません。逐次通訳の場合は、話し手が話し終えてから通訳を行うので、その際に記憶を呼び起こす助けとなるメモを取るための集中力、あるいは（同時通訳の場合は）聞き続けながら訳し始めるのに十分な集中力を維持しながら聞く、という聞き方です。覚えておかなければならないのは、全力を挙げて迅速に処理しないと、明確な訳出はできないということです。そして急いでください。逐次通訳では、通訳が終わるのを会場全体が待ちかねているのです。同時通訳では、話し手のペースに合わせなければいけません」

キャンプデービッドで行われたブッシュ・小泉首脳会談で通訳を務めるハーシー氏（写真右端）（写真 White House）

時には２つの言語の文化的･言語学的な違いが、円滑なコミュニケーションの障害となることもある。そうした隔たりをどうにか埋めて、会話が自然に運ぶようにするのが通訳者の仕事だ。「全く通訳できなかったのは、話し手が一言、あるいは一文ごとに間を置いて話をした時です。話し手の意図をつかむには文脈が必要ですが、このような話し方ではそれは無理なので、『先を続けてください』と小声でお願いしました」と、ハーシー氏は言った。ユーモアのとらえ方が文化によって違うことも、問題になることがある。「歴史上の人物や俳優など、外国の方が全く知らない名前や場所にまつわるジョークを通訳するほど難しいことはありません」と土谷氏は言う。「通訳にとっては悪夢です。ジョークを解説しようとすれば、台無しになってしまいます。以前に読んだ本に、有名な日露通訳者が、『今のはジョークです。うまく通訳できませんが、とても面白いジョークです。どうぞ笑ってください』と言ったため、ロシア人の聴衆がどっと笑い、その反応に日本人の話し手も大いに満足した、と書かれていました。差し迫った必要に迫られて、私も一度だけこの言い回しを使ったことがありますが（12 世紀の地方豪族の姫君についてのジョークでした）、やはりうまく切り抜けることができました」

一般的に翻訳と通訳は基本的に同じような仕事だと思われているが、実際にはこの２つの仕事は大きく異なっている。通訳は話し言葉を扱い、翻訳は書き言葉を扱う。それぞれに違った技術が必要で、ほとんどの場合、人それぞれどちらか一方に適性がある。通訳と翻訳の違いについてハーシー氏はこう言う。「主にスピードの違いですが、媒体の違いもあります。話すか、書くかですが、この２つの作業には大きな違いがあります。両方ともやることは、できるとは思いますが、

通訳と翻訳をどちらもうまくこなす素質と能力が１人の人間の中に備わっているとは思えません」

日英通訳が、困難だがやりがいのある仕事であることは間違いない。だが、言語上の技術のほかに、通訳志望者にはどのような素質が必要なのだろうか。ハーシー氏は、有能な通訳者になるための重要な資質について次のように語った。「分析能力。頭脳の機敏さ。集中力、論理性、そして表現力。幅広い一般教養と新しい分野に素早く順応して知識を吸収する能力。多くの人が、通訳者に求められる厳しい条件を過小評価していて、要は『語学に堪能』かどうかの問題だと思い込んでいます。それが必要な条件であることは認めますが、それだけでは決して十分ではありませんし、今挙げた資質のリストの上位に来るとも思いません。コンピューターに例えると、言語学や文化に関するデータベースは特別優秀でなければなりませんが、そのほかにも、世界の動きについての幅広い知識のデータベースや、議論の具体的なテーマに関する基本的な概念が集まったデータベースがなければ、何の役にも立ちません。それらすべての鍵となるのが、十分高速なクロックスピードとメモリーアクセスを備えたＣＰＵ（演算処理ユニット）で、これらのデータベースを活用して情報を処理し、理解しやすい形で出力できるほど強力な論理的アルゴリズムでプログラミングされていなければなりません」。一方、土谷氏は、通訳者にとって最も大切な資質は、「好奇心、集中力、学習意欲、そして話し手の感情を確かにとらえる感性」だ、と言う。

通訳者の訓練は、どこの国で行われるかだけでなく、それぞれの通訳志望者が何を最終目標とするかによっても変わってくる。まず、２つ以上の言語に堪能であることが不可欠である。通常は大学卒業資格が必要だが専攻は問わず、必ずしも外国語を専攻している必要はない。独学で必要な言語学的知識を習得できる通訳志望者の場合には、他分野を専攻した方が有利になることもある。政治学、経済学、法律、工学、生物学などの特定の分野で学んだことで、専門分野を持つために必要とされる貴重な知識や技術を得ることができる。

通訳、あるいは特定の専門分野で修士号を持っている通訳者も数多くいる。通訳者の需要がますます増えているにもかかわらず、通訳の修士課程を設けている大学院は世界中でも数えるほどしかない。例えば、言語と国際政策研究で有名な米国の教育機関であるモントレー国際大学院は、会議通訳の修士号や翻訳・通訳の修士号を取得することができる。同大学院のウェブサイトによると、学生たちは世界各国からカリフォルニア州モントレーまでやって来て、常勤講師を務める経験豊富な通訳者から指導を受け、現場の通訳者と同じ条件で、同じ技術を使って訓練を積んでいる。

ハーシー氏は、パリ第３大学（新ソルボンヌ）の通訳翻訳大学院（ESIT）で通訳を勉強した。そこで受けた訓練は、次のようなものだったそうだ。「ESIT のコースでは主に、通訳の演習を行いました。主に次のような指導法を取っていました。何人かの学生と講師がグループになり、その中から１人が事前にスピーチを準備して、特定の分野の専門家になったつもりでスピーチをします。それをグループの別のメンバーが通訳して、ほかのメンバー全員がそれにコメントします。コメントするのがほかの学生の場合には、自分の母語でない方の言語を母語としていることが多いので、母語でない言語での表現を正してもらえます。また講師の場合には、プロとしての経験から、今聞いたスピーチの一節の処理の仕方や、自分が持っている知的能力を一層活用する方法について助言をしてくれます。これが主な内容です。通訳の演習だけです。簡単そうに聞こえるかもしれませんが、

チリのサンティアゴで開催された APEC にて（右からパウエル元国務長官、ハーシー氏、ブッシュ前大統領、小泉元首相）（写真 Official White House photo by Erick Draper）

学業成績が優秀でも卒業に必要な実務技能を習得できない学生が大勢います。ほかにも、会議で通訳をする場合の準備の仕方、国際問題、通訳理論、経済学、法律などの科目もありました」

日本や米国には、大学プログラムのほかに、特定の学位や修了証書を授与せずに通訳を養成する民間の語学学校が多数ある。これらのプログラムでは、最新の設備を使用して、経験豊富なプロの通訳者でもある講師から実践的訓練を受けることができる。このような学校は通訳・翻訳サービスを提供する会社が経営することが多いため、養成期間中、あるいは修了後に実習訓練や雇用の機会が与えられることが少なくない。「日本では、ほとんどの通訳者が、有名な通訳エージェントが経営しているか、あるいはエージェントと強いつながりがある通訳学校で訓練を受けています。国際基督教大学や上智大学のように通訳コースのある大学もありますが、その数は限られています。私が教えているサイマル・アカデミーの場合、入学の際には、英語のレベルを見る試験と通訳試験を受けます。試験結果により、受講コースを決定します。クラスは予備科や通訳科、そして最上級の同時通訳科など５つのレベルに分かれています。６カ月コースの終了時に実施される試験に合格しないと、次のレベルに進級することはできません。最も優秀な生徒でさえ、『プロ』の会議通訳者になるには１年から１年半の集中的な訓練が必要です。学校で行われる代表的な訓練にはシャドーイング（聞こえてくる音声をそのまま声に出して言う）、リテンション（記憶保持）、パラフレージング（聞いた内容を自分の言葉で表現する）、ノートテーキング、逐次通訳、サイト・トランスレーション（あらかじめ用意された原稿を見ながら通訳する）、同時通訳（最上級コースのみ）があります」と土谷氏は言う。

日英通訳のキャリアに関心がある人にとって、準備を始めるのに早すぎるということは決してない。ＮＨＫグローバルメディアサービスは先ごろ、経験を積んだ通訳者を各地の中高一貫校に派遣して、通訳の仕事に関する講演会を開催するプログラムを始めた。講演会では通訳者が、海外経験なしでどのように通訳者になることができたのかを話したり、語学力を向上させるための助言を行う。また放送通訳や会議通訳での興味深いエピソードを披露したり、通訳を目指した動機を話すそうだ。さらに、通訳入門授業やデモンストレーションのオプショナルプログラムを付けることもできる。自らを米国最大のプロの通訳者・翻訳者の団体と称している米国翻訳者協会（ＡＴＡ）も、教育支援プログラムをつくり、米国内の学校を訪問して通訳や翻訳のキャリアについて説明することを会員に奨励している。プロの会議通訳者の世界団体である国際会議通訳者協会（AIIC）は、キャリアを選択しようとしている人にとって役立つ情報をオンラインで提供している。

2009 年９月 23 日にニューヨークで行われたオバマ大統領と鳩山首相の初の日米首脳会談で通訳を務めるハーシー氏（写真中央）（写真 Official White House photo by Pete Souza）

プロの通訳者になるべく１歩を踏み出す前に、この仕事に向いているかどうかを判断するにはどうしたらよいのだろうか。ハーシー氏は、通訳志望者にこう助言した。「まず、先に挙げた、有能な通訳者になるために必要な資質のリストを基に、真剣に自己評価をしてみてください。自己評価の方法としては、友達に新聞記事をじっくり読

んでもらい、その記事について短い、３分ほどのスピーチをしてもらいます。できれば自分の専門ではない分野でかなり技術的なもの、あるいは複雑で、何か主張があるものがいいでしょう。ノートを取らずにそれを聞いて、論旨だけでいいので再構成してみます。それができたら、通訳者になる見込みがあると言ってもいいでしょう。それから、通訳者になる準備として、会議の世界で実際に有用な分野を勉強してください。詩や文学ではないでしょう。工学、科学、国際関係、政治学、金融、経済学、法律などではないでしょうか。これらの分野からひとつを選んで、いずれかの目標言語で勉強してください。それが最善の準備になると思います。ほかにも、自分が使うすべての言語で、熱心にラジオやテレビを視聴したり、紙媒体のニュースを読むととても役立つでしょう」

土谷氏からも通訳者になることを検討している人たちに貴重なアドバイスがあった。「英語が堪能だからといって、一夜にして通訳者になれるわけではありません。通訳学校に入学してから、通訳者になるまでに１年から２年もかかると聞いてショックを受ける生徒はとても多いです。会議通訳者は、専門用語や業界用語だけでなくもっと広い概念も含め、あらゆることを学ばなければなりません。どうぞ通訳者になるまでの過程を楽しんでください。思っていたより長くかかるかもしれませんが、時間をかけ、努力する価値はあります」

来日したゲーツ国防長官と岡田外務大臣との会合で通訳を務めるハーシー氏（写真左からルース駐日米国大使、ゲーツ長官、ハーシー氏）（写真　米国大使館）

参考資料

米国労働省労働統計局、Occupational Outlook Handbook（2008-09 年版）、Interpreters and Translators http://www.bls.gov/oco/ocos175.htm

モントレー国際大学院
http://www.miis.edu/

米国翻訳者協会
https://www.atanet.org/index.php

国際会議通訳者協会
http://www.aiic.net/

Evolving English

変化は良い影響をもたらす

イラン・スタバンス

言語は本来、社会の中で永遠に変化する、生きている力である。本稿の著者イラン・スタバンスはこの事実を称賛し、特に英語を活力のある言語としているいくつかの要因について述べている。スタバンスは、米国マサチューセッツ州アマースト市のアマースト大学で、ラテンアメリカ・ラテンアメリカ系米国人文化論のルイス・シブリング記念教授を務め、「Dictionary Days」（グレーウルフ社）や「Love and Language」（エール大学出版部）などの著書がある。

英語には単語がどのくらいあるのだろうか。オックスフォード英語辞典（ＯＥＤ）によると、全部で60万語以上ある。もちろん私たちそれぞれの能力では、そのうちのわずかな部分しか覚えることができない。正確には、人間の語彙（ごい）数はどのくらいだろうか。その答えは、質問する相手によって異なる。１人の人間が持つ語彙数は、片言を話す幼児や、仲間内でしか通用しない言葉が語彙の大半を占めるティーンエージャーから、家庭や職場、友人関係など異なる場面で多様な語彙を使い分ける大人まで、一生の間に劇的に変化する。実のところ、語彙数は決して一定ではない。私たち個人が常に変化しているというだけでなく、言語自体が静的なものではないのである。通時的な語彙目録であるＯＥＤは、増大し続けている。現在は、過去のどの時点よりも多くの単語が収録されているが、そのうちの多くは古語であり、今ではほとんど使われていない。

これらのことから、言語には常に一過性と永続性という２つの相反する力が働いていることが分かる。死んだ言語だけが静的なのだ。アラム語を例に取ってみよう。現在では、一般的に歴史か宗教の学者しか使わない言葉になっている。従って、この言語は「ファクス」、「ソフトマネー」、「ステロイド」に相当する言葉を創り出す必要はない。その語彙は一定している。一方、多くの現代語（北京語、英語、スペイン語、フランス語、ロシア語、アラビア語など）は流動的である。これらの言語は、生き残るために絶えず外に向かって働きかけ、外国語の語彙を輸入すると同時に、大量の言葉を他の言語に輸出している。現代の世界における人口移動の大波は、瞬時に情報を伝える技術（テレビ、ラジオ、映画、インターネット）の発明と相まって、言語の融合を促進している。英語には、ゲルマン語派の単語がいくつ含まれているだろうか。スペイン語には、英語特有の表現がいくつ受け入れられているだろうか。その答えは、ここでも「たくさん」である。言語が生き残るには、一過性と永続性の間に緊張感があることが重要なのだ。言語は、中核がなくなるほど大幅に変えることはできないが、中核だけでは言語を活力あるものにすることはできないのである。

もちろん、ほかの言語と比べて変化しやすい言語も

新しい辞書を見る８歳の子供たち
（© AP Images/Moscow-Pullman Daily News, Geoff Crimmins）

ある。私はメキシコで生まれた。1985年に米国（正確にはニューヨーク市）へ移住してすぐに、アメリカ英語の臨機応変な性質に感銘を受けた。地下鉄に乗るだけで、私はいくつもの異なる言語と接することができた。共通していたのは、誰もが英語を習得したいと望んでいたことだった。だがその願望と、人々が母国から持ち込んだ言語が偏在することは、相反することであった。その結果、バベルの塔で起きたような言葉の混乱が生じた。言い換えると、どこに行っても、耳にする英語は純正ではなく、ほかの言語と混じり合い、常に影響を与え合っていたのである。私と同じように、多くの移民たちは日常生活の中で英語を学ぶ。もっと正式な英語の訓練を受けることができる人たちもいるだろうが、その人たちですら、至る所に浸透している大衆文化の影響を受ける。大衆文化は厳格な規則に縛られない。派手で、予想不可能で、混沌（こんとん）としているという特徴を持つ。よって、大衆文化を通じて言語がどのように機能しているかを理解するには、大衆文化がいかに自由であるかを正しく認識しなければならない。

私の蔵書には辞書が多く含まれている。大部分は単一言語の辞書だ。通時的辞書も数冊ある。アルゼンチンのスペイン語辞書、米国南西部の英語の辞書、カナダのケベック州で使われるフランス語の辞書など、国別あるいは地域別の辞書もある。医学、スポーツ、広告など分野別の辞書も持っている。さらに２カ国語の辞書や、２巻から成るヘブライ語とギリシア語とラテン語の辞書のような多言語辞書もある。それらの辞書を隣に置いておくと、ひらめきが生まれる。聖書やホメロス、ダンテから、シェイクスピア、エミリー・ディキンソン、アレン・ギンズバーグ、そしてデレク・ウォルコットに至るまで、これまでに創作されたすべての詩の構成要素が、もちろん寄せ集めの形ではあるが、辞書に収められている。私にとって詩人とは、言葉の「発見者」である。詩人はそれまでに無かった新しい秩序を言語に持ち込むことで、意味をつくり出すのである。

道行く人々の容ぼうは、米国の現代社会構造を反映しており、言語がいかに交じり合うかを明らかにしている（© AP Images）

辞書は、言語を結合力のある形で保つ上で必須の道具である。使用説明書であり、知識の貯蔵庫である。辞書はまた、過去の話し手が単語をどのように使っていたかを記録した記憶の箱でもある。さらに、辞書は抑圧の道具にもなりうる。政治的抑圧の時代には、反逆者が言葉を誤用している、つまり共同の遺産を悪用している証拠として、専制的な政権が辞書を利用する。辞書に関して、最もいとおしさを感じるとともに、いらだたしさも感じる点は、期待通りの効果を発揮しないことである。辞書は生来、常にその野望をくじかれるものである。新しいハードカバーのＯＥＤが出版された瞬間に、その内容はすでに古くなっている。その辞書の原稿が印刷に回されて以降に生まれた非常に多くの単語は、その辞書には入っていないからだ。シーシュポスの神話（編集部注：邪悪なコリントの王シーシュポスが、罰として巨大な岩を山頂まで押し上げるように命じられたが、岩が山頂に届きそうになると転げ落ちてしまうという状況が続き、永遠にその労苦が終わらなかったというギリシア神話の一節）のように、ＯＥＤの編さん者は、再び辞書の編集作業に取り掛からねばならない。出版した直後から、絶え間なく、永遠に、この作業を続けるのだ。しかし彼らが完全に成功することは決してないだろう。言語を封じ込め、制御できるようにするという、不可能なことをやろうとしているからだ。生きている言語は本質的に荒々しく、無限のエネルギーを持っている。

先に私は、移民について言及した。アメリカ英語の場合、米国人ジャーナリストのＨ・Ｌ・メンケンが正確に理解していたように、アメリカ英語が臨機応変な性質を持っている理由は、世界中から米国にやって来る移民から刺激を受けているからだ。米国が適切に機能すれば、移民たちは比較的短期間に、モザイク社会の一部となるために必

要な英語能力を習得できるであろう。しかし彼らの同化は、決して一方通行のものではない。移民が米国人になる一方で、米国もまた彼らの存在によって変わる。この相互作用は、特に言語のレベルで確認することができる。米国にやってきたアイルランド人やスカンジナビア人、ユダヤ人が流ちょうに英語を話せるようになったように、この国の言語も移民が持ち込んだ文法、表現、構文パターン、その他の言語ツールを取り込んだ。そして米国人はこれらの要素を受け入れたのである。

辞書編集者の多くが移民家庭の出身であることが多いと知っても、私はあまり驚かない。彼らの親は英語を学んだ人たちであるため、家庭内でも言葉についてよく議論していたのだ。なぜこの言葉はこのようにつづるのか。どう発音するのか。語根は何なのか。自分の経験から言えるのは、「移民は転向者である」ということだ。移民は、外からやって来て、ある言語に出会い、信念に基づいてこれを受け入れ、その言語を母語とする者がめったに持たないような熱意を持ってその言語の規則を勉強するのだ。

英語には単語がどのくらいあるのだろう、という先の質問に対して私がお勧めする答えはこれだ。

「十分な数ではなく、十分になることは決してない」

若者言葉

ロビン・フリードマン

ティーンエージャーがこの世に存在する限り、おそらくスラング（俗語）も常に存在してきた。今日、電子的通信手段が発展し、一部の学者の態度が変わってきていることにより、スラングは話し言葉の域を出て書き言葉の世界にも広がり、一層広く受け入れられるようになってきている。ロビン・フリードマンはジャーナリストであり、児童やティーンエージャー向けの著書がある。

「英語」が短くなってきていると感じているなら、多分その通りだろう。ニュースの情報量から、携帯メール、さらにはよく知られているように、注意力の持続時間が短縮していることまで、私たちは次第に言葉少なになり、より一層スラングに頼るようになっている。

なぜだろうか。

いくつか理由が考えられる。たとえば、技術の飽和状態が避けられない中での、息つく暇もない多忙な生活、絶えることのないティーンエージャー言葉の誘惑、そして従来、必然的にプラスではなくマイナスの方向へ進んでいく進化の流れ、などである。

最近では、日常的な通信の多くがオンラインで交わされている。これには電子メールだけでなく、次第に小型化する機器を使った携帯メールもある。だから日常の英語は、一般に知られている略語、数字と文字の不可解な組み合わせ、さらには顔の表情を模したシンボルに単純化されているようだ。:)

小文字しか使われないことも多い。

着信メッセージ―「How RU ?」
(© 2007 Jupiterimages Corporation)

数字の中でも特に「２（ツー）」と「４（フォー）」はスター的な役割を担っていて、それぞれ「to（ツー）」と「for（フォー）」の代わりに使われる。それよりさらに面白い変化は、数字の「３」を文字の「e」の代わりに使ったり（「be」の代わりに「b3」、「the」の代わりに「th3」と表記）、数字の「８（エイト）」の発音を利用して「great」の意味で

「gr8」、「later」の意味で「l8r」と表記するようになったことだ。

このような大胆な新しい略語の中には、実際に説明が必要ないもの(「you」の代わりに「u」、「your」の代わりに「ur」と表記）や、なかなか理にかなったもの（「before」の代わりに「b ４」)、あるいは文字の発音に着目したもの（「cutie」の代わりに「qt」、「see you」の代わりに「cu」)、略語として使うもの（「because」の意味で「cuz」)、ずばり頭字語そのもの（「best friends forever」の意味で「bff」)、中には一歩間違うと奇妙になりかねない（「people」の意味で「peeps」）ものもある。

皮肉なことに、もともとの表現よりスラングのほうが長くなってしまった事例もある（今は「i luv u」の代わりに「i heart u」が使われている)。

しばらく前から使われているスラングの中には、広く認知されているものもある。「laughing out loud（爆笑)」を意味する「lol」、「by the way（ところで)」を意味する「btw」、「in my humble opinion（私のつまらない考えですが)」を意味する「imho」などである。

その一方で、どうも意味不明なものもある。「if you know what I mean（お分かりでしょうか)」を意味する「iykwim」、「may the force be with you（フォースと共にあらんことを)」を意味する「mtfbwy」、「what you see is what you get（見た通りのものが結果に反映される)」を意味する「wysiwyg」などだ。

このようなアルファベットスープのような略語は、言語学者やコンピューターオタクではない普通の人間には、まさに目まいを起こしかねないような代物だ。しかし、運転中に、つまようじほどの大きさの機械を使って社内メモに返信せざるを得ない状況に陥ったときには（決して勧められることではないし違法だが、残念ながらよくあることだ)、略語のスピードや、必要性さえも、認めざるを得ない。

しかし「peeps」の例を除いて、先にあげたすべての例は、ほとんどが書き言葉のスラングだ。話し言葉のスラングとなると、これは全く別の話になる。そして話し言葉のスラングこそ、若者世代が言いたいことを自分たちの言葉で言える分野なのである。

最近のスラングの変化の速さは、昔のパスワード以上だ。なぜなら、わずか１～２年前に人気のあった言葉が、今のティーンエージャーの間では、特に理由もなくお払い箱になっているからである。「phat」、「sweet」、「excellent」、「awesome」はいずれも「素晴らしい」という意味だが、今は使われていない言葉の一例である。いかにも1990年代っぽいね、「dude（すごい)」。

何といってもスラングは、もともと短命なものである。スラングがスラングらしくあるためには、常に斬新な感覚が必要だ。スラングはファッションと同じで、その「旬」は決して長くない。最も人気があった言葉でさえも、最終的には米国人に飽きられてしまうので、自然淘汰（とうた）されて強い言葉だけが生き残るのだ。

会ってするおしゃべりも、メールやネットでのチャットもティーンエージャーにとっては大切な生活の一部（© AP Images/Marcio Jose Sanchez）

では、最近の「旬」は何なのか。最近とは今月のことだけれども。

「hot（良い、魅力的な)」を使えば、流行に敏感だと見られるだろう。もうひとつの選択肢として、少なくとも温度を表す言葉という点から見ると、大恐慌時代以降あらゆる世代に受けが良かっ

た言葉「cool」を使えば、確かに「cool（いけてる）」に見られるだろう。

「cool」はスラングの基準から見れば間違いなく時代遅れだ。生まれたのは1930年代後半のジャズ文化全盛の時代だが、それ以来、あらゆる世代が自分たちの時代のスラングとして取り入れてきた。

ちなみに「bully」、「groovy」、「hep」、「crazy」、「bodacious」、「far-out」、「rad」、「swell」など多くの表現が「cool」と同じ意味で使われたが、「cool」ほど息が長いものはない。

「cool」は現代のティーンエージャーだけでなく、その親たちにも同じように浸透している。大人は子供が使う言葉を横取りすることで有名だが、今日では、文字通り、ティーンエージャー市場に語りかける言葉を知っているかどうかが、商売の成否の別れ目になりうる。若者市場の傾向を追跡している調査会社テイラー・グループによると、米国経済におけるティーンエージャー市場の規模は年間1700億ドルと言われている。

「stick it to the man（あいつに文句を言う、あいつをひどい目に合わせる）」、「you rock（あんた、やるね、決まってるね）」、「whatever（勝手にしろ、好きにすれば）」、「old school（保守派）」、「talk to the hand（知ったことか、聞いてないよ）」など、非常に多くのスラングが、メディアであれ、大衆文化であれ、あるいはずっと年上の中年世代が日常的に使う言葉であれ、一般の言葉の中に入り込んできた理由は、それで説明がつく。

レポートの宿題での使用が禁じられている携帯メール用語やスペルを生徒と共に確認する教師。こうした用語は、多くの生徒が習慣的に使うようになっている（© AP Images/John Raoux）

何といってもスラング本来の魅力は、各々の世代が自分たちの語彙（ごい）をつくり出すことができることにある。その結果、言葉遊びの感覚で使える、楽しい言葉の集合体ができるのである。

しかし、そのような言葉は往々にして不道徳なものから始まっているので、不快な言葉にもなりうる。事実、スラングに反感を持つ人々は、長年にわたり、スラングが国民の言葉を低俗化させていると非難している。しかし、このような非難は、スラングが強い力を持っている証拠でもある。スラングは、本質的に、標準的な英語よりもうまい言い方をする。覚えやすいし、ユーモアや詩的なひらめきさえも放つことができる。

1898年に初版されて以来、高く評価されている大辞典であるメリアム・ウェブスター・カレッジ英英辞典は、1961年発行の第３版で従来のやり方を変え、一握りの研究者に意見を聞くのではなく、広く普及している出版物を参考に見出し語を決めることにした。

初めてスラングを掲載したその版は、「ぞっとする」、「嘆かわしい」、「恥ずべきこと」と言われた。

しかし今日では、すべての辞書がスラングを収録している。ただし、これに反対する人がいないわけではない。「規範主義」として知られている運動には、辞書は人々に適切な言葉の使い方を教えるべきだとの信念を持つ学者が参加しており、この運動に反対する人々を「lexicographer（辞書編集者）」ではなく「laxicographer（編集部注:「緩い」という意味のlaxとlexicographerをかけたものとされている）」と呼んで、無学を奨励していると非難さえしている。

一方「記述主義」の学者とは、どんな言葉でも一般的に使われているものは辞書に載せるべき、という信念を持っている者を指す。このような学

者の関心は、言語の適切さよりもコミュニケーションを成立させることにある。つまり彼らにとっては、誰もが理解さえすれば、伝達手段としてどのような言葉を使おうと関係ないのである。

古い世代は、古き良き時代への郷愁か、あるいは悪しき新しき時代に対する恐怖感から、若者による言葉の変化に抵抗するかもしれない。

とはいえ、現実には適切な言語というものは存在しない。言語は、時とともに常に変化するものだからである。

1930 年代、40 年代には、スイングとジルバの文化が当時の流行語を生み出した。1950 年代には、ビート詩人と早口のラジオのディスクジョッキーがその役目を担っていた。1960 年代はヒッピーだった。そして今日のスラングは、ヒップホップ文化とラップ音楽から生まれている。

そこで最後に一言。「Capiche, yo ? (ヘイ、分かったかい)」